地質ニュース654号，76－77頁，2009年2月
Chishitsu News no.654, p.76－77, February, 2009

「地質の日」の宣伝を中心とする日本地質学会の取組み

藤本　光一郎[1)]

1.「地質の日」と日本地質学会

1876年（明治9年）5月10日は，日本初の広域的な地質図である200万分の1「日本蝦夷地質要略之図」が，お雇い外国人である米人地質鉱山技師ベンジャミンS. ライマン（1835-1920）たちによって作成された日である．日本地質学会は，それから遅れること17年，1893年（明治26年）の同じく5月に東京地質学会として発足した．「日本の地質学」に掲載されている詳細な年表（今井，1968）によれば，第一回の会合が開かれたのは5月の第2土曜日とされており，カレンダーを調べると5月13日になる．5月10日の「地質の日」と僅か3日違いである．さらに，同年10月15日には学会誌である地質学雑誌が発行されている．

日本地質学会は，シンプルに地質という名のみを冠している学会であること，また，長い歴史と多くの会員を有していることなどから，「地質の日」制定に向けて積極的に取り組んできた．特に，2006年8月に当時の天野一男副常務理事による「地質の日」制定の提案が学会のNews誌に掲載されたことは制定への大きな契機となった．「地質の日」が制定されたことは，多くの地質学会員にとっての長年の思いの実現でもあり，たいへん喜ばしいことである．

2. 広報活動

学会としては，「地質の日」の広報活動に力を入れている．日本地質学会は，北海道，東北，関東，中部，近畿，四国，西日本の7支部から構成されているが，各支部に呼びかけて，「地質の日」を中心にした地域でのイベントに取り組んでいただくことを要請し，それに応えていただいた．また，学会のウェブサイト（http://www.geosociety.jp/）や日本地質学会メールマガジン【geo-Flash】，News誌，学会誌など，学会の持つあらゆる媒体を通じて「地質の日」の周知や行事の迅速なアナウンスをし，宣伝に努めた．多数行われたイベントのうち，いくつかの報告は地質学会のウェブサイトやNews誌に掲載されているので，是非ごらんいただきたい．

また，地質の日事業推進委員会との連名で，2008年5月1日には文部科学省記者クラブと日本科学新聞に対してプレスリリースを行った．地質の重要性や「地質の日」制定の経緯などを説明した本文に加えて関連行事のリストや由来となった地質図のコピー，「地質の日」のポスターも参考資料として添付した．日本地質学会では，近年年会などで発表される主な研究成果をはじめしばしばプレスリリースをしており，その結果として記事や番組に取り上げられたり取材を受けたりする機会も増えてきている．その影響がどの程度あるかは定かではないものの，「地質の日」関連の記事が何紙かに掲載された．

もう一つ，地質学会が行ったことは，日本記念日協会への登録である．記念日登録制度は，1991年に作家の加瀬清志氏が記念日の認定のために設けたもので，日本記念日協会へ記念日の名称・日付・由来などの必要事項を添えて申し込むと，協会で日付・由来などを審査し，登録認定の合否が決まる．登録されると，日本記念日協会の今日の記念日というウェブサイト（http://www.kinenbi.gr.jp/）に名称・日付・由来・リンク先などが掲載される．メディアなどの注目も増して取り上げられる機会が増え，多くの人々の目に触れるようになると言われている．ちなみに，5万円の登録料が必要であるが，今後の維持などに費用はかからない．1,000以上の記念日が登録されており，その数は年々増加していると言われる．地質の日事業推進委員会で2007年12月上旬に登録について議論

1）日本地質学会前担当委員，東京学芸大学 教育学部
184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1

キーワード：地質の日，日本地質学会

され，日本地質学会の事務局が登録作業を担当した．2008年の1月22日に認定され，2月から日本記念日協会のウェブサイトに掲載されるようになった．また，最近発行された記念日協会の2009年のカレンダーには，「地質の日」が記載された．

3. まとめ

日本地質学会は長年の課題であった公益法人化へ向けて最終的な段階にかかろうとしている．これからは，会員やアカデミックなコミュニティに向けての活動だけでなく，一般社会に向けての活動に一層取り組んでいかなければならないが，「地質の日」に関連する活動はその大きな柱になると考えられる．また，学会本部としては広報活動には積極的に取り組んでいるが，2008年の記念イベントについては各支部での活動に重点をおいたこともあり，結果として何も行うことができなかったのは少し残念であった．本部としても広報宣伝活動に加えて一般社会に向けた何らかのイベントを企画できるとよいと思う．

筆者は2008年5月まで日本地質学会の「地質の日」の担当理事として関わってきたことからこの記事を執筆することになった．ただし，実質的に記念日協会への登録作業や，広報活動を行ったのは日本地質学会事務局である．学会事務局の橋辺菊恵事務局長，堀内昭子さん，細川寿子さん，広報担当の倉本真一・坂口有人両理事，普及教育担当の矢島道子・藤林紀枝両理事に感謝したい．また，作業を進めるにあたりお力添えいただいた地質の日事業推進委員会事務局長である斎藤 眞理事にも感謝の意を表する．

文　献

今井　功（1968）：日本地質学会史年表．日本の地質学−現状と将来への展望−，日本地質学会編，449-517．

FUJIMOTO Koichiro (2009)：The activity of the Geological Society of Japan to publicize Geology Day.

＜受付：2008年10月30日＞